

工夫して取り組んだこと

マスク・検温・消毒など

- ・会場入り口で非接触型の体温測定、体調やマスク着用の確認、手指の消毒、ついたての使用。
- ・食事時間以外のマスク着用。食事中は話さない。テーブル消毒。
- ・台所でのアルコール消毒の回数を増やす。食事を盛る人を特定の人にする。
- ・小さい子どもにもマスクの着用を徹底してもらう。
- ・参加者に体調管理（寝不足、十分な栄養、運動）など注意を促す話題提供。
- ・受付に飛沫防止ボードの設置。

密 集

- ・厨房スタッフを入れ替え制にして、厨房内が密にならないようにした。
- ・利用者と接触するスタッフの人数を可能な限り少なくした。
- ・利用者が一度に食堂内に入る人数を制限し、密にならないようにした。
- ・密集を避けるため、来場の時間帯を二部に分けた。

換 気

- ・密閉空間にならないように、常時会場の窓やドアを開放していた。
- ・室内換気扇を強に設定したうえ、2方向のドアを開放し、換気に努めた。
- ・ドアや窓が1か所しかないので、換気のため、換気扇のほか4つの扇風機を常に稼働している。

配 置

- ・正面に人が座らないような座席配置にした。
- ・1つのテーブルに1グループまで座る約束とし、相席を中止した。
- ・密集を避けるため、通常4人で利用するテーブルを2人までに制限。
- ・隣との席の距離を空ける。簡易シールド作成。

工夫して取り組んだこと

テイクアウト／フードパントリー

- ・コロナ禍の中での活動開始となり、衛生面（調理、配布）の徹底と密を避け、安全を重視してテイクアウト方式で行うことにした。
- ・「みんなで作ってみんなで食べる」をコンセプトに活動しているが、会場の利用制限があり、みんなで集まって食事をとることが困難となったため、フードパントリーを行うことにした。
- ・スタッフに高齢者が多く、感染拡大リスクを考えると、食堂としての再開はできない。活動をフードパントリーにかえて、お米やご寄附いただいた食材を配る活動を行っている。

受け取り

- ・事前申し込み制にして、感染予防のお願いを行い、時間帯を分けてお弁当を渡している。
- ・フードバンクやその他の団体、個人から寄せられた食材、雑貨を参加者が受け取る際に密にならないよう、お渡しする時間や導線を工夫している。
- ・密を避けるため、弁当配布は、窓越しでの配布とした。また、感染防止のため、調理は炊飯と電子レンジのみとしている。
- ・受け取りだけでも密にならないよう、1～2組ずつ入ってもらった。
- ・ソーシャルディスタンスを守っていただき、間隔をあけて並んでいただいた。
- ・食事については、一部店舗にて小人数で受け入れを可能にしたほか、各自自宅に持ち帰って、食べることにした。
- ・使い捨ての食器類を使用し、感染リスクを軽減した。

食 事

- ・子どもたちには、特にたんぱく質を含む栄養が整っている食事である日本食を提供した。
- ・子どもが好きなメニュー、バランスのとれた食事をつくる。
- ・子どもだけでなく、ひとり暮らし高齢者も楽しみにしているので、できるだけ季節感を取り入れた食事（ちらし寿、鯛めし、焼き芋）を心掛けた。
- ・子どもたちに参加してほしいイベントに自主的に参加してもらえるように、イベントの後に子ども食堂を開催している。現在参加者の多くが中学生なので、彼らが好きな食べ物を用意することで、無理なくイベントにも参加してもらうことができている。

工夫して取り組んだこと

衛生管理

- ・子ども食堂の会場は、飲食店として保健所に登録されているが、子ども食堂として使用することを保健所に報告し、必要な指示を仰ぎ、指示事項を実践して行った。
- ・事前にスタッフが食品衛生責任者の講習を受講した。
- ・提供品については、製造年月日のシールを貼り、早めの消費をお願いした。
- ・感染予防のため食材の購入を事前に行い、冷蔵庫保管を原則とした。
- ・調理担当者の健康管理、調理用品の洗浄、食材の品質管理の徹底に努めた。

連絡先の把握

- ・感染者が出た場合に感染経路を把握するため、LINE登録やLINEコロナお知らせシステムを活用した。
- ・クラスターが発生したときに備え、連絡先を確認した。
- ・申し込み名簿、手渡しチェック名簿を作成し、保存する。

新しい技術

- ・キャッシュレス決済にもトライし、現金の受け渡しを少なくした。
- ・「こどもの食卓オンライン」と題して、子ども食堂を開催。町の協力飲食店・10店舗にてお弁当を配布し、子どもたちが受け取り、オンライン会議アプリを使用し、オンライン上で顔を合わせながら食事ができる環境を整えた。この方法だと、ある程度匿名性が保たれるため、児童福祉施設に滞在している子どもたちにもお弁当の提供ができた。
- ・Web会議サービスの活用度を高める。(なお、「Web会議サービスを使用できる家庭が少なく、参加できない子どもがいた。」との声もあった。)
- ・バーコード付きの利用者カードを導入することで受付時間を短くし、感染予防に努めた。

物品等の提供

- ・市から提供してもらったマスクをお弁当に入れた。
- ・地域からの食材提供を呼びかけ、お菓子や食材・野菜等もお弁当と同時に配布し、子どもたち及び子育て家庭に、より多くの支援を届けられるように努力した。

工夫して取り組んだこと

様々な工夫

- ・温かい食事の提供だけでなく、居心地のよい場、役割のある場、相談できる場になるように環境整備やスタッフの対応など工夫して取り組んだ。
- ・活動の再開に合わせて、気になる家庭への声かけを実施。
- ・注文を伝えるのに大声にならないように団扇（うちわ）に表記し、掲げて伝達するようにした。
- ・ごはんの量の目安となるように見本を置き、指差しで確認できるようにした。
- ・スタッフの制服を作成し、来場者がすぐに分かるようすることで大声を出さないようにした。
- ・会場で会話がなくて寂しいので、音楽を流すようにした。
- ・当活動の本来の目的のひとつである多世代交流と中高生のボランティアが実施できなかったため、野外広場において、近況や現在の困りごとなどの情報交換を行った。
- ・外国にルーツをもつ子どもたちにも支援が届くように、日本語だけではなく、英語での情報発信も行った。
- ・感染症専門家によるこども食堂無料相談に応募して、活動拠点の問題について相談した。公立小中学校に通う子どもたちは、毎日同じ人とだけしか会っていないので、感染していないことを前提に、今までどおり、子ども食堂を開催してもよい旨を聞き、あまり神経質になることをやめることができた。一方、大人に関しては、従来通り、子どもとの間の距離を取り、アクリル板を設置するなどの工夫をしている。

活動するにあたり苦勞したこと

手間の増

- ・食材と一緒に毎回お惣菜をつくってお渡ししているが、調理室に入れる人数が限られているので、手が少なく苦勞している。
- ・お弁当を配布するだけでも、アルコール消毒、換気、マスクの徹底を呼び掛け、調理中にもこまめに除菌するなど、以前よりも神経を使って調理している。
- ・フードパントリーを行うための食材の運搬にも苦勞している。
- ・会場に一度に入れる人数が限られ、普段より入れ替え回数も多く、時間がない中でテーブルといすの消毒を行う必要があり、大変であった。
- ・衛生管理を徹底することやおかずを小分けにしてパッキングするなど、コロナ前よりも手間や時間がかかり作業面での負担が増えている。
- ・コロナによる経済状況の悪化により、支援を必要とする人が増えているため、お弁当以外にも寄付されたお菓子や食品を配布する量も増やしているが、食品の管理（賞味期限など）やお菓子の袋詰めなど、開催日以外にも作業日が発生している。

担い手の不足

- ・感染予防のため、これまでのように地域のボランティアに依頼できず、スタッフの確保に苦勞した。
- ・スタッフが高齢者のため、コロナを心配して休む方がいた。
- ・検温を忘れた子の体温を測るスタッフを確保するのが難しかった。
- ・食中毒対策のため、お弁当は早めに調理して冷ます時間が必要なため、早い時間からの人手の確保に苦勞した。
- ・開催時間が早まったため、集合時間も早まり、社会人、成人若手の方の集合が難しく、60代を中心にお弁当づくりを頑張っている。若い方々の力が必要と思われる。

コスト増

- ・屋外開催になったため、タープテント、屋外テーブル、屋外炊飯用のコンロ、プロパン等、必要な物品が多く、資金繰りが大変だった。
- ・通常時（コロナ前）の子ども食堂では、大皿料理をビュッフェ形式で提供していたが、お弁当の無料配布に切り替えたことで、お弁当に適した食材や容器の購入など、費用面での負担が増えた。

活動するにあたり苦勞したこと

子どもの対応

- ・食事中にソーシャルディスタンスを確保できても、遊び始めた子どもたちに距離を保ってもらうことは難しい。
- ・遊び始めた子どもたちにマスクの着用を呼び掛けたが、どうしても外してしまう子がいた。
- ・子どもが集まると、楽しくなって興奮し、大声を出してしまったりすることがあるので、対応に苦勞した。
- ・食事時間中は、どうしても話してしまいがちなので、必要があるときは小声で話すよう注意した。
- ・マスクを忘れてくる子どもがいたため、用意していたものを渡した。

運 営

- ・ドア、窓を開放しているため、外に声が漏れ、近所迷惑に気を付けながらの対応が必要であった。
- ・近隣へ騒音などで迷惑をかけないようにする。理解してもらうための対応。
- ・調理場所が地域の集会所のため、感染防止の対策がなかなか取れず、本格的な調理の再開が難しい。
- ・200人を超える集客がある活動のため、来場者の予測が立ちにくい
- ・密にならないよう、できるだけ事前予約制にしたが、当日も希望者がたくさんいたので、混雑回避のためにスタッフを動員した。
- ・二部制にしてみたが、入れ替えの時間帯はどうしても人数が増えてしまう。

物 品

- ・多目的スペースを利用するにあたり、既存の物品だけでは、密を避ける空間づくりが難しかったため、テーブルやカウンターなどを購入した。
- ・シールドは購入すると高いので、手作りした。
- ・非接触型の体温計がしばらく手に入らなかった。そのため、価格が高かった6月に購入した。

活動するにあたり苦勞したこと

広 報

- ・学校へチラシ配布の依頼に行った。ただ、積極的には広報しづらかった。
- ・感染拡大の危惧から、大々的な広報が行いづらい。本当にニーズのある住民に周知されているか気がかりである。また、来客者や食数の予測が立てにくい。
- ・参加に関しては、どなたでものコンセプトだが、気になる家庭への呼びかけの仕方が悩ましい。
- ・地域の理解を図るため、協力団体である連合自治会、民生委員児童委員協議会、地区社会福祉協議会へ活動経過のお知らせを配布した。

食 事

- ・出来立てのおいしいものを提供してきたが、冷めてもおいしいメニューを工夫することに知恵を絞った。
- ・コロナ感染や食中毒を発症させないように、食材、料理の扱いや調理に腐心した。
- ・予約制ではなく、1日あたりの人数が把握できないため、食材が足りなかったり、余ったりした。
- ・ごはんやおかずが足りなくなったりして困った。また、コロッケを40個も作ったのに、10人くらいしか来ないこともあった。
- ・お弁当の外注をしたが、野菜が少なかったり、偏りがあったため、結局手作りに変更した。
- ・汁がでない献立や、傷みやすい献立を避けるなど、献立を考えるのに苦勞した。
- ・お米の寄付がなかなか集まらない。寄付がないときは自ら購入している。
- ・食中毒対策や汁が漏れない献立など、お弁当に適したメニューを決める。
- ・コロナ禍ということもあり、テイクアウトで実施した。そのような中で持ち帰って美味しいものという視点でメニュー選びを行った。

再 開

- ・「外出するな」、「近くのスーパーは使わせない」などと心ない電話がかかってくる中で再開をした。これまで利用されていた親子、家族から予約の電話をたくさんいただき、お互いに再開を喜んでいる。
- ・新型コロナウイルス感染症拡大により、地域活動も自粛されているため、社会福祉協議会等の地域組織の協力が得にくい。
- ・コロナの感染がおさまらない中、食堂をどのように再開したらよいか、スタッフで話し合いを重ねた。

今後の課題

担い手の確保

- ・引き続きお弁当配布の形式での活動になるため、早い時間帯から調理ができるメンバーを確保する。
- ・月1回でなく月2回開催としたいので、スタッフを増やしたい。
- ・感染リスクの減少する時期を見計らって、ボランティアの募集を再開する。

物品や食材の確保

- ・マスク、消毒液などの感染防止のための消耗品を購入できなかったときに、どうするか。多少の備品は準備している。
- ・食材を安定的に供給してくれるところがあれば助かる。近隣からの寄付もあつたりすると嬉しいが、ないときは購入する必要があるため、費用がかさむ。
- ・今後会食形式に戻ったときのことを考え、消毒液、検温器、2人用テーブル等をそろえていく。
- ・冬にかけて寒くなるので、換気と暖房の工夫が必要。

資金面

- ・テイクアウトの場合、容器代の負担がかかる。
- ・資金や食材確保のために、各方面への働きかけを強める。
- ・定期・継続的な寄付金や助成金の確保。
- ・プラスチックごみを減らすために、お弁当箱を紙製品に代えたため、経費が増加した。
- ・運営資金は、地域の方々の協賛金と食事代で賄っているが、大変厳しい運営状況である。特に、コロナの影響で、常設の会場で子ども食堂を行っており、毎月電気代などの固定費がかかるため、資金面で大きな課題が残る。

感染対策

- ・感染者を出さないことに尽きる。そのために日常的な感染予防策を徹底する。ただ、子どもたちは日常それぞれの学校に進学し、電車・バスを利用しており、また、子どもは感染予防への意識的な取り組みが難しく、感染リスクは非常に高い。
- ・利用者の入れ替え時間帯の密集を避けるため、途中で休憩時間などを設ける。
- ・マスクの着用など参加時のルールをその都度説明する時間を設ける。
- ・冬場は暖房の関係で密閉空間になりやすいので、窓を開放する時間を決め、スタッフで共有しておく。
- ・子どもたちが安全に来やすい場所にあり、比較的広い会場の確保や、自転車や車の駐車場の確保。

活動の周知

- ・地域の子どもたちや独居高齢者、小さな子を抱えた父母などへの食事の提供を本来の活動目的の一つとしているため、民生委員、地域活動に携わる方々、薬局と連携しながらより広く周知を進める。
- ・生活に困窮している人に食事を提供することを本来の目的としているが、なかなかそのような方へのアプローチが十分にできていない。
- ・感染症予防を優先にしながら、子ども食堂を必要としている方々への手厚い支援の継続ができる環境づくり（子ども食堂を開催していることの情報発信など）。
- ・孤食、欠食状態の子どもたちや、シニア、単身者への働きかけ。地域のシニアクラブ、民生委員、学童クラブとの連携強化。
- ・活動の趣旨（子どもの孤食解消、子どもの居場所づくり、親の子育て負担の軽減）を改めて家庭に伝える。
- ・場所柄、お客様の来店は順調。しかし、本当に届けたい人にどれだけ届いているのか。コロナ禍で本当に困っているシングルマザーの方、高齢者の方たちにどうやって活動を知らせるか。町内会などのご支援を頂いているが、地道な広報活動をしていかなければと思っている。
- ・運営資金となる寄付金や食材、ボランティアの確保など、社会や地域とのネットワークを築くことで、より安定した運営体制を整えていきたい。そのために寄付金の送付方法の選択肢を増やす。また、リーフレットづくり、スポンサー企業のチラシ広告掲載など運営資金を増やす工夫をしていきたい。

今後の課題

ストレス

- ・新型コロナの感染状況によって、先の見通しが立たない中では、子どもたちの心の負担は、ますます大きくなっていくと思われる。感染防止に努めながらその時にできる取組みをいかに継続していくかが課題となっている。
- ・学校の休校や例年と違う流れに戸惑う子どもも多く、また保護者の仕事の変化などによって影響を受けている子どもたちの気持ちを受け止める必要を感じた。
- ・本来、会話をしながら楽しんで食事をしてもらうことを活動の目的としているが、会話を極力少なくしなければならないという中での食事となり、子どもたちはストレスを感じていたと思う。

活動の継続・再開

- ・現在学童クラブの子どもを対象に子ども食堂を行っている。一般の方を対象とした子ども食堂は、感染対策が確立できていないため、実施できない。開催を希望する声もあるため、早期に再開することが課題である。
- ・コロナ第3波で今まで以上に感染拡大が広がっている。安心・安全面を考えると、今年度はフードパントリー活動を中心に行っていたほうが良いと思う。しかし、この活動を行っている中、コロナの影響で確実に生活に困っている人たちが増加していることが分かるので、テイクアウトで作ったものを提供した方がよいのではないかと迷っている。臨機応変に活動していきたい。
- ・令和3年1月から通常再開を考えていたが、感染拡大により、当面は状況に応じて変則的な対応をしていく。子どもの居場所としての役割が消えないように活動を続ける。
- ・冬になり、万が一自粛要請が出たときにご家族と調整を行いながら、いつから休止にするかの判断をする必要がある。
- ・新たに立ち上げた「こども食堂キッチンカー」により、より安全な屋外の環境で、子どもたちにあたたかい料理を提供する場所づくりを進めていきたい。
- ・今後の課題はコロナ禍での継続である。必要などころにできる限りお弁当を届けていく。セントラルキッチンのような形態で行う予定。

居場所としての子ども食堂

- ・集まることができないので、食を手渡すことはできても、課題をすくいあげる機会の創出が難しくなっている。食材を手渡す短時間の間で、それぞれの家庭が抱えている課題をどのように把握し、解決に結びつけるかが課題。
- ・家族同士の交流の機会も失われているので、この状況が長引くようであれば、それをどのように作り出していくかも課題と考える。
- ・コロナ禍などの不測の事態が起きても、変わらず長く食堂を継続していくことの必要性を痛感した。
- ・地域の独居高齢者も気軽に立ち寄ることができ、参加者同士、顔見知りになって、笑顔を楽しむ場所を提供する。
- ・毎週月曜日の定期開催を目指し、地域の方の集いの場となるように努めていきたい。
- ・子どもたちが楽しく食事ができる空間づくり。
- ・当面の感染状況では、食堂、勉強部屋等の再開は困難と思われる。しかし弁当の受け渡しだけでは、交流の機会が失われるため、次年度に向け、安全面に配慮した場の設定や情報誌の発行を検討していく。